

生存科学研究ニュース

Vol. 38, No.2

2023.7 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

生存科学研究所の理事長に就任して 松下 正明



2023年5月4日、青木清前理事長が急逝され、副理事長であった私が理事長職を引き継いでいましたが、同年6月27日、理事全員の重任が評議員会で承認され、直ちに開催された理事会で、私 松下正明が2023年6月

27日以降の理事長に選任されました。また、副理事長には、新たに丸井英二氏、専務理事には引き続き竹下啓氏にお願いすることもご承認いただきました。会員の皆様におかれましては、今後とも引き続き、ご支援、ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

青木先生とは、ほぼ10年間、ペアを組んで、生存科学研究所の運営に関わってきました。研究所創設者の元日本医師会会長の武見太郎先生の、「生存の理法の科学的解明」という基本的な理念に沿って、生存科学の発展に努力してきました。その理念に向けて自主研究、助成研究を中心的な活動とし、加えて、シンポジウムの開催や後援、研究成果の出版などの研究所の広報活動を行ってきました。内容によっては多少の見直しが必要かもしれませんが、このような活動の基本的な在り方はこれからも継続していきたいと思っています。

以前から、私どもの研究所のなかで、「生存」という言葉の意味について繰り返し問われてきたように思います。種々の国語辞典によれば、「この世に存在すること」「生命を持続すること」「生きながらえること」「生き残ること」「生物が生き残ること」「人間らしい生き方を全うすること」

など世間ではいろいろな使われ方がされていますが、「生存の理法」を究明するという立場からいえばいまひとつ説明が不十分な印象を受けます。

私は、「生存の理法」における生存とは、「人間が、地球、世界、国、民族、地域という様々な社会のなかで、また、自然の環境、他の生物との共生のなかで、さらに、水害や地震、飢饉や戦争などの自然災害、人災に見舞われるなかで、生命をもって生まれ育った人間が心身ともに健康で、差別なく平等に、満足して生活できること」と定義すれば、「生存の理法」研究における問題意識がより明確になるのではと考えています。つまり、理法の解明を必要とする「生存」は、いわゆる生物としての人間の生命科学(ライフサイエンス)を基本にしながら、自然科学の領域をはるかに超えて、社会科学、人文科学に及ぶ広範な科学的接近を必要とする包括的概念であると私は理解しています。そうであるならば、すべての学問が「生存の理法」と関連するといっても過言ではありません。

また、「生存の理法」を追求するためには、「生存」そのものを対象とすると同時に、「生存」を脅かすもの、「生存」にとって障害となるもの、つまり「異常な状況における生存」、「病的となった生存」を対象とする研究方法が「生存」自体の理法の解明には必要であると考えています。

以上、新理事長就任にあたって、いささか大上段に振りかぶったきらいがありますが、特別な事新しいことを述べたわけではなく、会員のみなさんもおそらく考えておられる問題意識を再確認するために、あえて披瀝してみました。

これからの生存科学研究の発展のために、共に歩んでいくことを念じています。

(東京大学名誉教授)

「アドバンスケアプランニングの議論から
わが国の患者主体の医療を再考する」研究会
研究責任者 鶴若 麻理

2023年3月20日(月)10時から12時、木村利人氏(早稲田大学名誉教授)をお招きして、研究会(ZOOMによるリアルタイム)を開催した。木村氏は、日本において、いのちの尊厳と人権を守るため、新しいいのちの知恵を求めて、既存の枠組みを超えた「市民の活動」を基盤にいのちを守り育てる超学際的協働学問としての木村バイオエシックス(Bioethics)を新しく創造し、現在(89歳)に至るまで世界的な活動を続けている。「幸せなら手をたたこう」の作詞者である。

テーマは「患者主体の医療(ACP; Advance Care Planning)の展開と日本における患者主体の医療—バイオエシックスの視座から—」で、21名(看護師5名、大学生2名、大学院生5名、生命倫理学者6名、看護学教員1名、弁護士1名、僧侶1名)が参加し、日本のACPの展開とその課題について活発な議論が交わされた。

木村氏の話提供では、木村氏の人生のナラティブ(物語)をふまえつつ、まず(1)木村バイオエシックス(Bioethics)がどのような問題意識で構想され、展開していったのか、(2)バイオエシックスの考え方とACPの考え方の重なりについて、スライドや写真を用いた話がなされた。

(1)では、木村バイオエシックスの構想の原点は、父親のいのちの終わりについて、本人はもとより母親や息子である自分にすら、肺がんである真実を伝えないという事態に直面し、父親の人としての権利を無視された非人間的な医療に対する痛烈な疑問であった(図1)。

患者の人権無視の医療 / Injustice!
ヒポクラテス～医心方～以来のPaternalismの伝統
Advance Directive から
Advance Care Planning への背景

- ① 真実告知は?
- ② 検査の目的?
- ③ 痛みのケア?
- ④ 処置の選択肢?
- ⑤ 退院の可能性?
- ⑥ 平穏な死?

図1: 非人間的な医療

さらに、東南アジア(フィリピン・タイ・ベトナム)で過去の戦争の悲劇に直面したことも大き

く影響した。WHOや国連での活動もふまえ、いのちを専門家にゆだねてきた従来の発想を変革、市民のイニシアティブと患者としての「自己決定」(主体性)の原則を提唱し、いのちの主体としての患者の尊厳を尊重する医療のあり方を構想した。まさに日本の医療において、患者の権利、インフォームドコンセントの実現と実践を展開していった。

(2)では、木村バイオエシックスの構想から言えば、現在日本の医療現場で注目されている「ACP」は、まさに患者の権利の一つとして、患者主体の医療の実現に欠かせない考え方であることが指摘された。ACPの目標は一人一人の幸せの実現であり(図2)、尊厳をもった自己決定する主体として私たちが生きることには他ならないという。まさにACPの実践というのは、あらかじめ情報、判断、決断を、家族、医師、看護師、ケア専門家等と共有することであり、その実践のあり方は患者を主体とした形での既存の枠組みをこえ検討していくことが必要との指摘であった。

ACPの目標～幸せの実現

尊厳を持った自己決定する主体として生きる
バイオエシックスの視座～患者になる前からの発想

- 1. 診断・検査・医療処置の内容につき知る権利
- 2. 病気や怪我の予防など健康教育の主体・実践の権利
- 3. 健康増進と不慮の死の回避のための知識・教育の権利
- 4. 治療/(不可能な場合も)へのCareを受ける権利
- 5. 疾患による苦痛の除去を求める権利
- 6. Dynamicないのちを充実させ、安らかな終わりへ

**ACPの実践: あらかじめの情報・判断・決断を
家族・医師・看護師・ケア専門家等と共有する**

図2: ACPの目標は何か

参加者からも多くの質問とコメントがあり、議論のポイントとしては以下3点であった。

一つは、ACPの目標とは何か、である。木村氏よりACPの目標は一人一人の幸せの実現であるとの意見があり、参加者からは、日本においては、ACPの目標が十分語られていないのはいか、患者も医療者も目標を改めて見定めることで、その実践と展開を検討する必要があるとの議論が交わされた。

二つは、ACP自体が医療者からみた手続きになっているのではないかという点である。特に話題提供にあったインフォームドコンセントが、日本で定着していく過程でみられている、同意書の作成に重きをおくような考え方やその実態との共通点である。ACPそのものの意味や意義につい

ては多くの人が賛同するものである。その一方、良きことを医療において行うという考えのもと、その細かな手続きが重視されてしまい、本来の患者主体であることが見失われているとの議論があった。

三つは、目指すべきことを発信し続けることの重要性である。木村氏からは、長年にわたって、木村バイオエシックスの理念のもと、患者の権利やインフォームドコンセントについて、医療現場や医学教育などでのそれらを具現化する啓蒙活動を行ってきたことが話された。

以上、木村氏の話題提供と研究会での議論をふまえて、視野狭窄に陥らず、世界的な歴史の中から、ACP の位置づけや展開を歴史的に明らかにすること、加えて、平和、安全を基盤にし、すべての人々が健康であるためのひとつの具体的な実現として ACP を考えていくことの意義と重要性について多くの学びがあった。

【生存科学叢書】(日本評論社) 新刊

『レジリエンス—よみがえる力—』

森・風景・地域・人の交差の中で
清水美香 編著

本書は、近年の様々な環境変化の中で、自然・人・社会の関係性、特に森-風景-地域-人にある関係性に様々な分断が見られる状況に対し、どのようにその分断を修復し、関係性を再生、または再構築できるか？という問いへの手がかりを求めて、描かれている。その手がかりへのヒントは、自主研究会(森とレジリエンス～地域の再生～)に集結した異なる専門性やフィールドをもつ研究者・実践者間の互いの振動・共振と、時には葛藤しながら進めてきた対話と、書き手自身の専門性・実践の交差を通して引き出された。

本書が焦点を当てる関係性、またはつながりの支点になるものが「レジリエンス」思考である。レジリエンス思考は、森をはじめとする自然・風景・地域・人のある相互性、実践、歴史、文化などの詳細と全体の両方を連続的に見て、編み合わせることを促す。本書を契機として読者の方々が、失ったもの、失いかけているもの、日頃



見えていないもの、見えにくくなっているものを掘り起こし、自然、とりわけ森と人の関係性を見直し、日々の暮らし、地域やコミュニティ、都市と地域の関係性を振り返り、実践に向かうことを願っている。

2023年3月30日発行 ISBN 978-4-535-58782-3
本体価格 2,600円

新役員のご紹介

令和5年6月に役員が改選され、新しい執行部が決まりました。以下の役員を中心に当財団の運営に当たってまいります。よろしくお願いいたします。

- | | | |
|-------------|--------|----------------------------|
| 理事長 | 松下 正明 | 東京大学名誉教授 |
| 副理事長 | 丸井 英二 | 人間総合科学大学人間科学部教授 |
| 専務理事 | 竹下 啓 | 東海大学医学部教授 |
| 常務理事 | 小林 芳子 | 元公益財団法人生存科学研究所事務局長 |
| | 高木 廣文 | 神戸市看護大学特任教授 |
| | 藤原 成一 | 元日本大学芸術学部教授 |
| | 松田 正己 | 東都大学沼津ヒューマンケア学部看護学科教授 |
| 理事 | 赤林 朗 | 米国ニューヨーク大学医学部・医療倫理学分野・研究教授 |
| | 安梅 勅江 | 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授 |
| | 大林 雅之 | 東洋英和女学院大学名誉教授 |
| | 小泉 英明 | (株)日立製作所名誉フェロー |
| | 津谷 喜一郎 | 元東京大学大学院薬学系研究科特任教授 |
| 監事 | 小川 春男 | 亜細亜大学名誉教授 |
| | 山下 昌彦 | 弁護士 |

研究会等日報

- 5月8日(月) 幼小接続期の教育から生涯のwell-beingを考える～沖縄の文化をいかし、教育格差、健康格差、医療格差を軽減する試み～研究会
- 5月15日(月) 過疎地と都市部における高齢者の心理・比較研究
- 5月23日(火) 森とレジリエンス～地域の再生～研究会
- 5月29日(月) 幼小接続期の教育から生涯のwell-beingを考える～沖縄の文化をいかし、教育格差、健康格差、医療格差を軽減する試み～研究会
- 5月29日(月) 我が国におけるソーシャル・インクルージョンの実際と実現可能性の検討ー育児や介護に関する社会的支援に対する意識調査からー
- 5月29日(月) COVID-19 蔓延下における持続可能な社会的支援のあり方：食支援活動利用者の利用実態と社会生活上での葛藤に着目して研究会
- 6月6日(火) 理事会開催
- 6月11日(日) 幼小接続期の教育から生涯のwell-beingを考える～沖縄の文化をいかし、教育格差、健康格差、医療格差を軽減する試み～研究会
- 6月13日(火) 資本主義研究会講座開催
- 6月19日(月) 過疎地と都市部における高齢者の心理・比較研究
- 6月27日(火) 評議員会開催
- 6月27日(火) 理事会開催
- 7月14日(金) 生存の理法と現代社会の課題に関する実践的研究-人的環境に焦点を当てて-研究会
- 7月25日(火) 常務理事会開催
- 7月26日(水) 「避難所地域のリスク情報コンテンツ製作」に向けた、成城学校地理研究部との連携で進める地域防災研究

訃報

弊財団理事長 青木 清(あおき きよし)儀(享年 85)は、病氣療養中の処5月4日(木)午後10時11分に逝去しました。

ここに心から哀悼の意を表すとともに謹んでお知らせいたします。

故青木理事長は、1984年3月の財団設立時より理事、また2011年6月からは理事長を務めてまいりました。

生前の故人に対するご厚誼に心より感謝申し上げます。



夏季休業のお知らせ

当財団では、誠に勝手ながら下記日程を夏季休業とさせていただきます。

■夏季休業期間

2023年8月14日(月)～8月18日(金)

休業期間中にいただいたお問合せについては、業務再開後に順次回答させていただきます。

皆様には大変ご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

